

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter (2) 添付ファイル

要約：「宇野理論を現代にどう活かすか」と【投稿】横川信治（武蔵大学）「録音テープを聴いての感想」を添付します。

要約：「宇野理論を現代にどう活かすか」

開会の挨拶：櫻井毅

マルクス経済学の低調が指摘されて久しいが、その中で多少とも宇野理論が関心と影響を強めているのは、宇野先生がマルクス経済学をイデオロギーや政治の影響から切り離して科学、学問としたことによるものであろう。マルクスが『資本論』の序文で、科学的批判を歓迎すると述べたと同様、宇野理論も科学的批判を歓迎しそれに耐えなければならぬ。宇野理論に対しては先生の生存中から学派の内外に批判が存在した。没後30年に当たってのこの研究集会が、宇野先生がマルクスの求めたものを求めたのと同様に、宇野先生が求めたものを求める立場で、どうすれば宇野理論を現代に活かすことができるのか、有意義な成果を収めることを期待したい。

【報告】

鎌倉孝夫（元埼玉大学）：宇野理論の真髄 現状分析への有効性

（1）現在グローバル化が進んでいるが、その主役を演じている金融多国籍企業がギャンブルを通じて实体经济を攪乱し、格差社会や環境破壊を作り出している。経済学はこのことの理論的解明を果たさなければならない

（2）形態論は実体論を確立するものとして意義がある。実体論について3点を指摘したい。

第1は、資本が実体である労働力を包摂する労働力商品化の特殊な条件は、形態（資本）自身からは出てこないこと。

第2は、実体の包摂に伴う制約で、これは恐慌論の問題であるが、時間の制約から省く。

第3は形態の自立化の問題で、これは資本の理念とその具体化という難解な問題だ。資本の理念が擬制資本としてでしか現実化しえないことを把握することによって、はじめて、今日の金融ギャンブルの世界をその極限的な世界として認識できるのではないか。

大黒弘慈（京都大学）：宇野理論形成の背景 純粹と模倣

（1）基準としての原論は社会主義イデオロギーから完全に免れず、むしろそれを不可欠とする。イデオロギーが理論の中に入ってはならないが、理論を展開する際の宇野のいう「消去作用」として不可欠なのではないか（理論とイデオロギーの問題）、第2に、その基準は不純化しないし逆転する現実の歴史の変容からの影響を免れず、むしろそれを不可欠とするものではないか（論理と歴史の問題）。

(2) 原論と段階論を合体させるべきだと思はないが、分けてなお逆転ないし移行をもたらす論理が段階論で担いきれない問題として残る。それを考えるのが原論の問題ではないかと思う。宇野は方法の模写を純粋化傾向の面のみで取り上げているが、「逆転」の論理も原論に反映されるのが方法の模写ではないか。それが可能であれば、原理論は段階論・現状分析の単なる基準ではなく、普遍的な資本の原理になるのではないか。

(3) 「唯物論」(方法の模写=現実的抽象)にもとづいた、国家と資本との同時成立・同時並行性の認識は、宇野においては原理論と段階論との方法的分化となって結実した。しかし原理論の純粋性が、段階論と切り離されてそれ自体として論じられるとき、純粋資本主義論の理想型への縮退、資本がそれ自体として自立しうるかのような錯覚の生まれる余地もまた生じた。

小幡道昭(東京大学):「純粋資本主義」批判 変容論の可能性

(1) どこまで宇野『原論』を正面きって批判しぬけるのか、真価が問われている。

(2) 現在は、宇野弘蔵が原理論を基礎に構築した資本主義の歴史像の埒外に彷徨いでてしまった。資本主義がどんなに変わろうと変わらない部分を抽出したのが原理論である、ゆえに、資本主義がどのように変わろうと、原理論は変わる必要がない、といった同義反復はドグマの常套句、宇野<理論>でもマルクス<経済学>でもない。原理論の主要命題を変更すれば、資本主義の歴史的発展も異なって現れる。

(3) 「純粋資本主義」の概念が段階論と原理論をつなぐ結節点になっている。マルクスの歴史と理論の合致論に対して、宇野は合致しないことのほうに原理論の積極的な意味を見いだしている。「状態論」を純化の方向に進めるアプローチ(純粋資本主義論)と接近と乖離を理論に組み入れる傾向論の理論化というアプローチ(変容論)が考えられる。

(4) 原理論には理論化できない空白領域(開口部)が複数存在する。これらの開口部に対する特定の想定を内的に関連しているものとしてまとめることで、多様な資本主義像が浮かび上がる。「純粋資本主義」はその一つである。特定の想定を内的に関連するものとしてまとめ上げるためにはイデオロギーが必要である。

馬場宏二(元東京大学):宇野理論究極の効用

(1) 現在宇野理論体系はかつてない危機に陥っている。危機の第1は、1991年にソ連が崩壊したこと、段階論を第1次大戦できて良かったかという問題。もう一つは、ソ連をつぶしたのはアメリカだが、宇野理論体系はこれまでアメリカを正当に扱ってきたかという問題。

(2) 決定的な点は第1次大戦で段階論を打ち切ることをやめることだ。古典的帝国主義段階から発して、ロシア革命から1991年のソ連崩壊までを大衆資本主義段階、その後をグローバル資本主義段階と2段階増設する必要がある。

(3) 原理論は、私のいう過剰富裕化との関係で再考してみる必要がある。過剰富裕化を説くためには、まず資本主義は効率とか成長とか、生産力の発展において他のいかなる社会よりも強いのだということをいったほうがよい。さらに手掛かりの一つは原蓄。宇野先生は

原蓄を大変重視していた。原蓄は資本主義の自己破壊力の初期の表現だった。もう一つは原理的なカテゴリーの中で、拡大再生産が最劣等地の耕作を拡大して生産性を低下させ、労働者の生活水準の低下あるいは利潤の減少を必然化することの内に資本主義の自滅性を示すこと。

(4)最後に「究極の効用」だが、宇野理論を上のように修正すれば、過剰富裕化論に行き着くことはできる。しかしそれを防ぐ実践論はない。必要な実践は、将来の世代のためにわれわれの生活水準を落とすことであり、そのための政策である。宇野先生は実践について次のように語ったという。「進むときには詩があればよい。退くときには哲学がいると。」

【コメント】

永谷清(元信州大学):「私のコメント」

(1)宇野はマルクスの自動崩壊論を原理と段階論の同一視の誤りとして批判した。小幡はこれを「マルクスの純粋化=崩壊論に対する宇野の不純化=没落論」といっているが、そのような単純化は疑問。「段階論から自立した原理論」という考えは原理論という概念自体を否定するもの。

(2)大黒は、宇野の方法模写説からすれば、逆転の経緯も原理を構成する論理に模写されていなければならないというが、帝国主義段階の出来事にも模写説を適用して原理論に逆転が模写されるべきというのは、原理論への段階論の混入になる。

(3)現状分析は、一定の仮説を必要とする。資本主義が変化したのに原理論がそのままなのはおかしいというのは仮説としての理論と原理論を混同している。

河村哲二(法政大学):「「段階論」構成の方法と資本主義の諸カテゴリーの現実態」

(1)原論の再構成とは、原論の諸カテゴリーが現実の諸要素と融合して現実態となる契機を容れうる「制度化」のロジックを明らかにすることである。

(2)ある時期の資本主義的世界編成の景気循環を主導する基軸部門と基軸国、その動向に規定される周辺産業、周辺国、その統合性の欠如、それを前提する貿易・資本取引、国際的資金構造循環、国際通貨・金融関係の機構的關係による総括。こうして、世界的な編成とその機構的關係の特定の型が現れる。

(3)資本主義発展段階論は、「パックス・ブリタニカ」段階と「パックス・アメリカーナ」段階という2大区分に再構成されるべきである。パックス・アメリカーナの問題を、「金融資本規定」を中心として「帝国主義段階」を延長するだけで十分にその特徴をとらえうのかどうか、疑問が残る。

【私の発言】

岡部洋実(北海道大学):「原理論と歴史主義」

(1)宇野は、原理論の現実への直接適用を拒否し、実在からの抽象である理念型としての段階論を現状分析の基準とした。

(2) 原理論にその諸要素の恣意的選択によらないリアリティを要求している。この構成法は帰納主義でも演繹主義でもない、歴史主義的方法である。

吉村信之(信州大学):「宇野理論と現代資本主義」

(1) 1990年代以降のアメリカ経済の復活を目にするとき、この現状の分析基準となる段階論は投機的資本主義としてのアメリカを主役として構成すべきであると考えられる。

(2) この点は「原理論」にも跳ね返る。激発性恐慌論とその背後にある商品貨幣論と現実との落差の意味を原理の側から明確にする必要がある。

(3) 長期金融論としての擬制資本論および為替市場論を原理的に位置づける必要がある。

柴垣和夫(新潟産業大):「グローバル資本主義の本質についての1試論」

(1) グローバル資本主義の本質を金融グローバリゼーションによるカジノ資本主義化に見ることには同意できない。

(2) 多国籍企業によるBRICsへのアウトソーシングの大規模な展開が、労働力の供給制約と賃金上昇を大幅に緩和した。この点にグローバル資本主義の本質があるのではないか。

(3) しかし、BRICsの労働市場とて無限ではない。やがて、社会的緊張がふたたび激化し、福祉国家への回帰が見られるだろう。

関根友彦(愛知学院大):「今日における宇野理論継承の問題点 海外と日本」

自分の宇野理解と日本の宇野派、ことに第3世代との理解がまったく異なる。

第4世代への3つのアドバイス。

(1) 宇野理論を外国語でも考える必要がある

(2) 近代経済学を勉強し、内側からそのイデオロギー性を明らかにするのが「経済学批判」の本質である。

(3) ヘーゲルの弁証法を勉強しなさい。宇野の原理論と段階論の関係は、ヘーゲルの「論理学」と Realphilosophien と一々対応(isomorphic)の関係にある。

横川信治(武蔵大学):「制度派マルクス経済学 宇野理論と進化経済学の統合は可能か」

(1) 基礎理論(資本主義の一般的な基礎理論)、中間理論(各資本主義世界システムの基礎理論とその形成、確立、変質の歴史分析)、現状分析という多層的分析の枠組みを制度派マルクス経済学として提案したい。

(2) 宇野の理論には資本主義社会の次ぎは社会主義であるという目的論が見られる。従来この点は「イデオロギー」として扱われてきたが、これはイデオロギーではなく方法論の問題である。

(3) ホジソンは、メインの生産制度の他に複数のサブシステムとしての生産制度が存在することにより社会的再生産の継続が可能になる点を論じている。生産制度のサブシステムとしての家族とか国家などは、ブラックボックスに入れなくて、基礎理論に取り込む必要がある。ブラックボックスに入れると、資本主義経済に内在する不安定性のみが強調され、

不安定性と安定性が並存する資本主義のダイナミズムを明らかにできない。

半田正樹（東北学院大）：『『経済学研究の究極目標』というアポリア』

（１）宇野は社会主義の必然性を前提としたという意味で、現状分析を資本主義没落についての透視装置としてイメージする姿勢を垣間見せたと考えられる。

（２）現在、社会主義というオルタナティブ社会への構想が多様化、分散化している状況があり、他方で、グローバル資本主義の暴走が止めどなく続く状況がある中で、このような現状の分析は政治的実践にどう役立つのか。

（３）第２世代が資本主義を商品経済の関係だけによって自立可能と考えるのに対し、第３世代は資本主義的关系だけでなく、国家・家族その他の制度や組織に補完されてのみ自立性を持ちうると考えている。したがって資本主義は「進化する資本主義」としてとらえられ、その現実の位相を位置づけた上で、それに対するオルタナティブ提言する必要がある。

【フロアからの発言】

川上忠雄（元法政大学）

（１）現在、資本主義はますます強力になっているが、それは同時にそれが依存する外部環境をすりつぶして衰亡しているように見える。しかも他方で暴走するグローバル資本主義そのものが機能不全を起こしている。性格の違ったこの二つが重なって進行している。これをもう少し考えていく必要がある。

安保哲夫（帝京大）

（１）グローバル資本主義の先に何を展望するかを知りたい。

三輪良一（元青山学院大）

（１）馬場さんの過剰富裕化論は使用価値の過剰をいっている。マルクス経済学では生産力にプラスの価値を与えているが、いまや生産力の発展は無制限に善とはいえない。

（２）使用価値の制約性を経済学の中にどう読み込んでゆくかを考えることが大切。

佐藤公俊（長岡高専）

（１）経済といっても市場経済だけでなく、非市場経済の領域を考える必要がある。

（２）生産力を上げてゆくことを通して環境破壊のようなロジックしか出てこなかったのは残念だ。人類の生存の可能性について経済学は応えていくべきだ。

木村雅則（松本歯科大）

（１）横川さんの宇野理論と進化経済学の統合について、また目的論と還元主義についてもっと聴きたい。

小林弥六（元筑波大学）

（１）資本主義のあと、あるいはポスト資本主義として、第３の道があるのではないか。

（２）宇野理論あるいはマルクス・モデルは現在の経済学批判としては不十分ではないか。

川上忠雄（元法政大学）

（１）宇野さんはつねづね現状分析では「理論は忘れる」といっていた。説明できない現

状に直面したときに理論を練り直す必要がある。

河村哲二（法政大）

（１）理論の人は原理のほうから現実を見ている。しかし資本主義の次の方向は、現状分析から具体的に見ないと何も見つからないのではないか。

高橋満（帝京大学）

（１）自分は中国経済をやっているが、社会主義と市場経済という二つの面を持つ中国モデルは変換しつつある。インドや東アジアも変換しつつある。

（２）宇野の三段階論は資本主義だけではなく、移行経済や開発経済を分析できる。

岡本磐男（元東洋大）

（１）金＝ドル体制の崩壊したニクソン・ショック以後をマルクス経済学でどう考えるか。

（２）アメリカの双子の赤字がどんどん大きくなってドルが下がり、為替安定のための会議が招集されてもアメリカの国際収支と財政の赤字が解消されなければ、資本主義の危機が来る。

瀬戸岡紘（駒沢大）

（１）人類が地球規模で生き続けられるようにすることは経済学者の義務だ。京都議定書にあるような地球温暖化の防止をもっと拡大する方向で政策提言してゆくようなことを、マルクス経済学でもやっていかななくてはならない。

横川信治（武蔵大学）

（１）非純粋性原理では、古い生産制度の上に新しい生産制度が重なり、屋上屋を重ねる形で新しい生産様式が形成される。新しい生産制度によって古い生産制度が代替されるのではなく、新旧の生産制度が補完的な制度として再構成されていく。資本主義市場経済だけでは、社会の存続を説明することは不可能なので、宇野の「純粋資本主義」は「還元主義」の一例である。

【報告者のリプライ】

鎌倉孝夫（元埼玉大学）

（１）川上君は現状分析には理論は忘れよ、という話であるが、逆に今日の現状から資本論や宇野原論のような理論を導こうとしても無理だし出来ない。なぜ古典経済学から資本論を経て宇野原論が形成されたか、という客観的基盤をきちんと考える必要がある。

（２）段階論の組み換えとかあったが、私は否定的だ。

（３）株式資本がないとか、説けないとかいう人もいたが、株式の形態は説いているがその売買は説いていないということだ。

（４）環境問題は重要だと思う。資本という形態が実体を包摂して価値増殖を行おうとすると自然力の収奪の問題が生じてくる。

大黒弘慈（京都大学）

（１）社会主義イデオロギーの消去作用が後景に退きすぎたところに、宇野理論が行き詰

まっている原因がある。

(2) 資本主義が変質しているので価値法則の毀損が生じるという永谷さんの見解は、価値法則を過度に理想化しているのではないか。

(3) 原論の移行の弁証法と制度論はどう関連するのか検討する必要がある。

(4) 原論は理念型だが歴史的アリティがあるという、岡部さんに同感する。

(5) マルクスの資本主義観が経済学批判として成立してきたところに特性があるという、関根さんの見解に同意する。

小幡道昭 (東京大学)

(1) 現状分析の問題が出たが、原論まで降りてこなければならぬということを強調した。

(2) 安保さんの質問があったが、宇野体系のようにこういう風になると先にわかっているならば、そういうアプローチは可能であろうが、それが怪しいということを自分は述べている。

(3) 社会的価値判断にタッチしなければならないし、理論的にもそういう時代に入っていると思う。

馬場宏二 (元東京大学)

(1) 問題は過剰富裕化で人類が滅びるということで、そういう状況からみれば、経済学者のやるべきことは、今までの成長論をひっくり返して逆の経済収縮政策ができないかということである。

【投稿】

録音テープを聴いての感想 横川信治（武蔵大学）

印象的だったのは、第3世代と第2世代との違いがかなり明確になったことです。その違いを原理論、段階論、現状分析に分けて整理します。

（1）原理論。第3世代は「純粋資本主義」の想定を再検討している。小幡の「変容論」は、原理論に外装された前提を明らかにすることによって、原理論のイデオロギー的な価値判断を明らかにする。横川は宇野の社会主義イデオロギーを方法論として問題にし、そこに含まれている目的論を理論体系から取り除き、さらに「非純粋性原理」の導入を提唱している。

これに対し、永谷、関根は「純粋資本主義」を容認した上で、原理論をヘーゲルの「論理学」あるいは新カント派のアプリオリな理論体系として想定している。

（2）段階論。第3世代の河村や横川は、第1次世界大戦後を単に第4段階ではなくイギリスを中心とする資本主義世界システムと並ぶ、新しい資本主義世界システムと捉えている。小幡は、外装された前提によって異なる原理論が形成されると考えていることから、段階論を不要と考えている。

これに対して、鎌倉、永谷、柴垣は第1次世界大戦後を、宇野と同様に現状分析の対象と捉える。もっと第3世代よりの馬場でも、それを第4、第5段階と捉えていたり、帝国主義段階の小段階と捉えている。

（3）現状分析。

柴垣の金融不安定性と現実経済の安定性を労使対立の減少によって説明する観点や、馬場の過剰富裕化の観点は、宇野派以外、たとえばアンドルー・グリンの『狂奔する資本主義』にも見られる。欧米の多くの優れた経済学者の場合、現状分析で問題を見つけた場合、それを説明する仮説を立て、その仮説を検証する。実証されたそのような仮説の集大成が「中間理論」を構成することになるが、ここで興味深いのは、川上の「現状分析では理論を忘れる」という発言である。現状の説明ができなくなったときに理論を練り直すという宇野の発想は、中間理論の発想に近い。

この研究集会の議論を整理することで、現在発展の方向を見失っているように見える、宇野理論の発展の方向をいくつか発見できそうな気がします。

（1）理論のオープン化の方向。正統派経済学は、経済・社会環境の変化によって理論の現実説明能力が減少すると、次々とヘテロドクス理論を換骨奪胎して部分的に取り入れ理論の再構築をしている。宇野理論を「正統派経済学批判」として維持するためには、その現実説明能力が減少すると、ヘテロドクス理論を換骨奪胎して理論に取り入れ理論を再構築していく必要がある。宇野理論のこのようなオープン化は中間理論（段階論）としてはかなり受け入れられている。原理論をオープン・システム化しようとする試みも出現している。

（2）閉鎖体系にして理論の精緻化をはかる方向。理論の自己矛盾を少なくするという意

味では、学派の範囲をできるだけ限定し、できるだけ少ない前提条件のもとに、演繹的に理論を形成する閉鎖体系が有利である。この方向での問題点は、学派の範囲を限定するため、たとえば「純粋資本主義論」と「世界資本主義論」は相互を排除しあわざるを得ない点である。一般的に、このような方向での精緻化は解明できる現実の問題が少なくなるという問題点を抱えているが、宇野理論の場合には、段階論ではオープンな体系がとられてきたため、その弊害は少ない。しかし逆に原理論と段階論の方法論的なギャップの拡大という問題が出現している。

詳細は『季刊経済理論』第 45 巻 1 号に、「国内学会動向『宇野理論を現代にどう活かすか』」と題して掲載予定です。